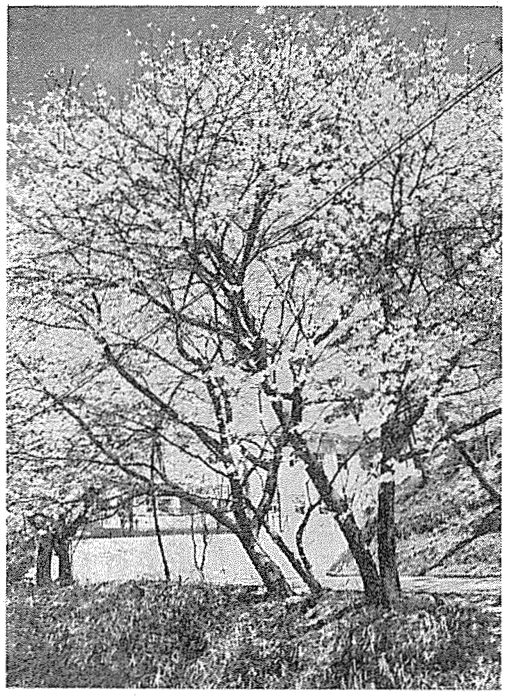
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, May 30th, 1956. No. 291.

# 關西大學學報

昭和31年5月　第 2 9 1 号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年五月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二九一号



旧正門通の桜（千里山）

關西大學學報局

西洋見学

# アラブ諸国裏話

廣瀬捨三

七月十七日午後五時四十分カイロ空港をサイプラス・エアウェイズ機で立つ。丁度座席のところが非常口で「エクソドス・キンディニュ」とギリシャ語でも書いてある。成程、エジプトだと苦笑する。来た時はイエルサレムから丁度「エジプト記」の逆コースだつたが。当日午前にカイロの日本大使館へ挨拶に行くと文芸評論家の中村光夫さんが来合わされてピラミッドのガイドのたちの悪いのに大いに憤慨、故国へ書いてもあなた方に迷惑にはならないでしようねと大使館員の方に云つておられるのを聞いて、小生もアラブ系諸国のガイド其他外国人と見ればたかろうとする、私はこれを総称して「ガイド乞食」と呼ぶ者をつぶさに経験してきているので、大いに共鳴、では私はキプロス島から悪口を書きますと、大使館の岡さんに二人でアラビヤ料理の昼食を御馳走になつた時約束して別れたのである。

それでこれからぼつぼつアラブ諸国の棚下しをすることにする。先づアラブ諸国で悩まされたのは一にアラビヤ文字に数字、二に祈禱、三に音楽、四にガイド乞食である。偶然今まで回教国ばかり廻つてきたのだが、何んといつてもまだヨーロッパは知らんが、日本と較べて一段格がおちる。回教が未開の民族に適しているのではないかと思うし、又一面回教の為にアラブ諸国が進歩出来ないのでないか。我々の使つている数字はアラビヤ数字というのだからこの通りかと思えば左に非ずで、0かと思えば5で、7かと思えば6である。其他全然異るのである。バグダードの交通機関はバスとタクシーだつたが、バスは全部アラビヤ文字だから何処へ行くのやら何にも判らない。アラビヤ文字のネオン・サインなんか、初めは珍妙で吹き出したくなつた。イエルサレムでアラビヤ語独習を買つてやり出したが、ものにならぬうちにしまいだ。関西大学でもアラビヤ語をやつておられる方もあるが、そういう方が小生のようなコースを歩かれたら嘸かしためになつたことであろう。コカコラは日本では大してうまいとも思わなかつたが、このあたり（先は何処まで続くか判らぬが、キプロス島も）一体コカコラ文化である。ドライブ道の途中には必ずコカコラ店がある。又暑い時であるからまことにうまい。コカコラのアラビヤ文字だけは漸く覚えた。あゝコリヤコリヤと踊つているような字だ。

バグダードで毎晩浪花節のような唸り声が拡声器で聞えるので何かと尋ねると祈禱をしているので、コーランの文句を節をつけて唸つているのだ。汝等人に知られず部屋で祈れとは反対で、これには大いに迷惑した。その国へ来ているのだから仕方がないものの、ベイルートやカイロの繁華街のホテルにいた時は喧しい上にこれをやられるのである。「沙漠に日が落ちて夜となる頃、恋人アラビヤの唄を歌うよ」という昔流行歌があつたが、そのアラビヤの唄というのが又珍無類で、レコードで同じところばかり針が廻つているように、何処までいつても同じ調子なのである。生活が単調なので歌も単調なのだとヨルダルの人が云つていた。これまたラヂオか何かで夜遅くまでガアガアやつている。よく飽きないものだ。イエルサレムへ着いた晩同宿の人に誘われてオリエンタル・ハウスというホテルへ行くと、庭園の松林に色電球をつけて三々五々テーブルにいたが、やがてバンドがジヤズやマンボーをやり出して、久しぶりで日本で聞き飽きた西洋音楽を耳にして懐しかつた。やがてダンスが始つた。カイロやここでもこんな光景はもう見飽きて、このバンドの音楽もチンドン屋とあまり異らぬようだ。音を出すものには悪口をいうのだから、遺跡巡りか博物館行の方が安全だ。

バグダードでは初めは街ですれちがう人々も一寸気味が悪くて思わず上衣のボタンをはめた。アラブ系の人は西洋人とも違つて一種異様な感じだつた。開襟上衣なしも多く、ちやんとネクタイをしめて上衣を着ているのは、御本人はパリッとしているつもりなんだろうが、上衣が一体に長過ぎて滑稽だつた。黒衣をすつぽり頭から被つた婦人の乞食が袖を引くのでよけて通つた。男もアラビヤの服装をしている方が堂々としているようだ。慣れるとまだむし暑い風の吹いている夜も出歩き、狭いバザーや裏街も歩いたが、他のアラブ系諸国と較べて陰鬱だつたが、ここがまだ一番外国人づれがしていなかつて、後で好感が持てた。ベイルー

トへ行くと婦人の黒衣姿も少なく一体に色彩のけばけばしさが目立つた。空港へ着くなり日本人の誰々を知つていると日本名を云つて慣れ慣れしく話しかけてくる若者があつて、一緒にホテルまで行つたが、明日バールベック、ザハリへ行こうという。結局翌日タクシーでバールベックへ行きザハリで昼食をして帰つたのであるが、まあこれがホテルを根城とするたかりのガイドである。これじやつまらんとこちらは次からそのタクシーの運転手と直接話し合つて、数日に亘つてレバノン国内大半とシリヤのダマスカスまで行つてきた。ある日運転手の弟だと称する少年が同乗してきて二日に亘つてこちらと一緒に乗り廻した。運転手はあまり英語が出来ないが、この少年は話すので便利だつたが、これも弟ではなくて、こちらにたかつてロハで方々見物出来たわけである。どうも油断もすきもならない。ダマスカスからベイルートへ帰りに国境でレバノンの役人まで乗せてくれというので、ベイルートまで乗せてやつた。たかつて乗るのが国情らしいとこちらもある日ベイルートの街でヨルダン公使館を尋ねあぐんでいる時、丁度顔見知りの運転手のタクシーが来たものだから止めて同乗した。後には婦人客がいたが途中で降りてからヨルダン公使館へとばしてくれた。レバノンには四人に一台自動車があるそうだが、まあ車のお蔭で国の大半を見た。見なかつたのはトリポリとレバノンのシダー（杉）位のものだ。ベイルートの市電はとびのり、とびおり自由自在にやつているので、こちらは乗りかねた。

イエルサレム空港へ着くと早速政府検定済のガイドがたかつてきて、表を見せてはべらべら喋る。こちらはまだ東も西も判らんのに何をいつているのだと聞き流してホテルへ着くと又別なガイドがいて、先のガイドも来て客のとりあいだ。ホテルのはホテル付らしく、先のはすごすごと引上げたが、外へ出ると又話しかけてくる。まことに商売熱心だ。結局翌々日ホテル付のガイドを雇うことにしたが、五日間自動車賃も拝観料、チップ皆込みで、一日十三弗半だというので、こちらもさるもの、ホテルの隣りが政府の観光局なので、ホテルの主人と同道、そこへ行つて、これこれいうが高いか安いかかけ合つて貰つた。まあこれならreasonableだとの答だ。こういう上層部は行くとコーヒも出してくれて、まことに親切なのだが、こちらは海千山千のガイドをガイドしなければならない。この五日間ガイドとの虚々実々の勝負果して如何というところだ。

第一日目（六月十九日）はイエルサレム旧市内見物。こんな狭い街は一日で充分だつた。午後にはガイドを待たして散髪する。ダマスカス門から城外のホテルまでは歩いても十分位だが自動車で往復だ。二日目は一日自動車で朝はヘブロン、ベッレヘム、午後はヨルダン河、死海、エリコで、死海で海水浴をして茶店で休んだが、この六百円程は別に払つてくれと、そろそろガイドの本性を表してくる。次の一日は休んで、こちらは考古博物館へ行つてくる。第三日目（六月二十二日）はナブラスとサバステで、昼食はこちらだけナブラス第一のホテルで五百円出して食べ、ガイドは勝手に何処かで食べてきた。この日帰つてからあと二日分も払つてしまつたのが、こちらの落度で次の日からは別なガイドをよこしてきた（まだよこすだけましかもしれんが）。その第四日目午前は諸王の墓にガーデン・トームで、こんなものは見るのに一時間もかからない。流石に気がさしてか、この替玉ガイドに喫茶店でアイスクリームをおごつて貰つた。午後は又ボロ自動車でエンコウスへ行く。往復二時間もかからない。第五日目朝又替玉ガイドと共にボロ自動車でオリーブ山やゲッセマネの園へ行くと先のガイドはすまして他の観光客を連れて説明してござるのには恐れ入谷の鬼子母神だ。午後はテクシーでケドロンの谷へ、往復一時間十五分しかかからない。金になりそうな客だと見ると如何にも親切そうにして、金にならんとすると掌を返したようになる。これはカイロでも同様だつたことは以下に述べよう。

途中で一日丸休みした分まで払つてくれ、こちらは仕事が出来なかつたのだからと勝手な理窟をつけるので、馬鹿も休み休みいえ（こういう英語がうまくいえないのは一寸歯痒いね。）とはねつけてやつたら、ガイド氏あきらめたらしい。ヘブロンへ行つた時はガイドの兄と称する人物と小供とが同乗してきて、ロハで一緒に見物だ。ガイドの叔父や兄弟が多くて困るよ。

六月二十五、六、七の三日間はひとりでイエルサレムの内外を歩き廻つたが、重なところには皆ガイドとも乞食とも判断のつかぬ人物がいて、ハローといつてはよつてくる。アラブ諸国で英語で話しかけてくる者には相手にならず、第一近づけてはならぬことは以下に述べる通り。オリーブ山へ昇ろうとひとりで行つた時も話しかけてくる若者がいて、こちらは例によつて相手にならずに歩いていると、自分はガイドじやない、学生だといつてくるので、話し乍ら丘をのぼつてゆくと、父はユダヤ人に殺されて、家では弟が腹をへらして待つている、パン代をくれとそろそろ本性を表してくる。天下の名所オリーブ山といつてもこの辺人の子一人いない淋しいところだ。五十円やつたら百円くれとしつこくせがむ。馬鹿にするない、こちらはアラビヤ乞食にやるような金は持合しておらぬ。喧嘩

になると英語は歯痒いね。世界に有名なアラビヤ人のhospitalityは何処へ行つたとシエクスピヤばりのせりふをいつてやつたが、相手に通じたかどうか。こんな奴は皆せびるだけで手出しはしないからまだましである。尤もこの附近で真面目な学生にも会つたことは前便の通り。此頃の若者のしつこくせびるのは日本だけかと思つたら世界共通らしいね。くれないとみるとグッド・バイと帰つてしまつた。

カイロのホテルで一泊、朝出ようとすると早速トルコ帽を被つて上衣、ネクタイしめた若いガイド氏が待つてござる。こちらも利用してやれと日本大使館へ案内させてやつた。次の日（六月三十日）はトルコ大使館へ案内させてビザーを取つてきた。それから又いよいよガイド氏と何日でいくらと話し合いだ。エジプトではこちらはもうあまり金を使いたくないので、カイロ市内とギゼーのピラミッドだけにする。半日づつで全部こめて四千円とのこと。カイロ市内といつても二、三の回教寺院を見て土産店を覗く位だ。このガイド氏、ガイドの最中でも機会があればメンフィス、サカラへ行けばいくらに負けておくと口角泡を飛ばしていうので、今はお前はガイドしているのだからお前の職業に忠実であれといつてやつた。こちらが相手にならないものだから果然二日目は替玉ガイドである。これは私の叔父で、今日は云々の用が出来たから、代りにこの叔父にピラミッドを案内さすというのである。これ亦ボロ・タクシーでピラミッドまで行く。駱駝に乗つてからこれだけは別で今一弗よこせとピラミッドの裏側人の居らぬところで宛ら強奪である。駱駝引きというのが又このガイドの目をぬすんではこちらにチップをくれとせがむのを相手にしないと、ひとりで行けと手綱をこちらに渡してしまうのである。馬には乗つてみよ、人には添うてみよというが、駱駝は初めてだが、駱駝位何んぢやとひとりで乗つていたら、駱駝もおとなしく歩いてくれる。今度はスフィンクス前へ来ると写真屋が待ち構えている。大型で注文させておいて後で葉書型もあるというのだ。トルコ帽を小生に貸した奴はチップくれというし、今度は第一ピラミッド内部見物でガイドは外で待つていて、専門の奴が中を案内してくれる。入口に又二、三人いて、いきなり小生の帽子をひつたくつてしまつた。スエズ以西マルセーユまでは帽子を取られたら、なぐつて取りかえさねばいけないとかねて亡き村上喜貞先生が語られたことがあつた。出しなに恭々しく小生の帽子を捧げ持つてくるので小生一ピヤスタ（十円）やると、その少ないのに驚いていた。乞食が何を文句いうか。ピラミッドの案内人も出てからチップを要求するので、これにも十円やつて、わしはまだこの国の金の価打がよくわからんのでねとうそぶいてやつたら、ガイドが渋々なにがしか又渡していた。ピラミッド附近に警備の巡査らしいのがいるが、これは専らガイド乞食の取締りで我々ではないらしい。寺院の陰へ廻ると占い師がいて金にしようと砂に何やら書き出すので、いらんいらんと通り抜ける。ガイド自身も思わぬ金がいつたとまだせびるので、そういう時は、相手にならず、人のいる場所へ出るに限る。彼等はただそうするのが仕事と思つているので、それ以上のことはようしない。帰りに何か飲もうかというので、こういう時にイエスというとこちらが払わねばならぬから、僅かな金といえども癪だからわしは咽喉がかわかないというと、ガイド氏渋々途中で車を停めてコカコラ二本注文して一本おごつてくれた。御し難きガイドともこれでおさらば。

前に述べたように街頭でハローとよつてくる奴は避けていること魚雷の如く、千日前で青空女給をよけて通る如くであつたが、或日この魚雷にカイロの街頭でぶつかつたのである。果して如何なることが起つたかは、もう紙数も尽きたから、次の便を楽しみに待ち給え。（昭和二九年七月二七日、キプロス島パフォス、ニュー・オリンパス・ホテルにて記す）

（文学部教授）


昭和31年校友名簿

予約して下さい

終戦後二冊目の校友名簿が六月末に出来上る予定です。

現在印刷組版中ですので、御入用の方は早急に御申込下さい。限定出版ですから六月末以後の御申越には応じかねるかも判りません。

30年度校友総会御案内の際、併せて御希望の程をお伺いしましたが、この際改めて、代金を添えて御申込み下さい。

尚名簿の正確を期するため、知友諸兄の住所職業の異動もお手数ながら至急ご連絡お願いします。

B・5判、六〇〇頁、頒価実費五百円

御申込は

關西大學校友課

大阪市大淀区長柄中通
振替大阪一二七八五番

*Message from the British Consul-General in Osaka-Kobe, Mr. Dudley Cheke, to the Kansai University on the occasion of the celebration of the 150th Anniversary of the Birth of John Stuart Mill.*

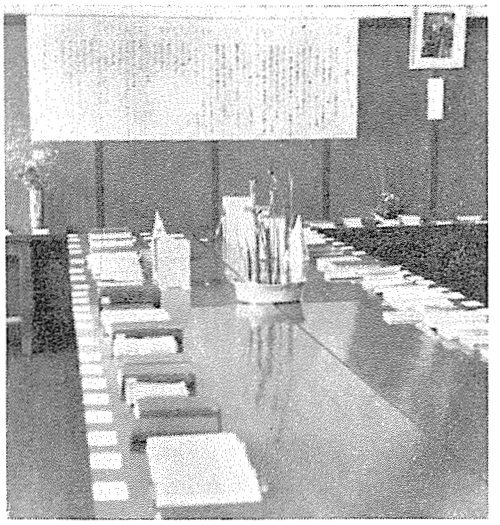
---

It is a great pleasure to me to be afforded this opportunity of conveying my greetings to the Kansai University on their celebration of the 150th anniversary of the birth of the British philosopher and economist, John Stuart Mill.

The famous author of the book "On Liberty" one of the strongest supporters there have ever been of freedom of thought, freedom of speech and freedom of the individual; high principles which are as relevant to the problems of today as they were in the Victorian age.

Mill, I may add, was a man who took education very seriously indeed. He held, somewhat over-optimistically as we may think, that education is a cure for all social evils and that rational argument can ultimately convince humanity of what is good. He certainly did not fear to practice what he preached. Before he was fourteen he had studied classical literature, logic, political economy, history, general literature and mathematics. At sixty, after a life in which public service took its full place beside academic pursuits, he had become Rector of the ancient Scottish University of St. Andrews'.

Let us pay respectful homage to a man whose life was devoted to the search for a system of laws and morals which would promote "the greatest happiness of the greatest number."



ミル文献展示会

# J・S・ミル

## 生誕百五十周年記念会

關西大學
經濟學會

J・S・ミルは一八〇六年(文化三年)五月二〇日ロンドンにおいて、当時の有名な著述家であり、思想家でもあつたジェームズ・ミルの長男として呱々の声をあげた。

ミルの履歴については、その著「自敍傳」に詳しく見えるところであるが、幼にして父の膝下において厳重な監督のもとに異常な早教育をうけた。即ち、三才にしてギリシア語を、八才でラテン語に進み、十二才のときには入念な研究コースを定めて、経済学、論理学、形而上学などを勉強し、十四五才で既に大学教育に匹敵する学力を蓄えるに至つていた。

十七才にして父の関係あつた東印度会社の印度商館に入り一八五六年まで三十数年をここにつとめた。そうしてこの職務は彼の哲学上文学上経済学上の多方面にわたる多くの研究をつづけるに十分の余暇のあるものであつた。彼自身の日常生活はあまり交際社会を好まぬ性格であり、かつまれに見る勉強家であつたので、商館に出入する以外は、日常の殆んどが著述と研究とにあてられた。

しかしミルにもプラトニックな女性との交際があつた。それは、ロンドンの薬種商ティラァ氏の夫人(ハリエット・ハーディ)に、ミル二十六才のときに紹介され、ティラァ氏の諒解をえて、二十年間も清らかな交際をつづけ、一八五一年、ティラァ氏の死去に当り、親近者の反対を排して夫人と結婚した。

晩年のミルはただ一八六五年に代議士に選出された以外は静かに南仏のアヴィニョンで余生をおくり、一八七三年五月七日、「家つきの病」肺患によつて、不屈不撓の知的努力と、人道、真理のためへの忠実な献身的奉仕に満ちた六十七年の生涯を終つた。

ミルについては自由論とか代議政体論、あるいは功利主義論等、その政治的道徳的思想の側面が早くからわが国に紹介され、自由主義思想の守護神の様であつた。と同時に経済学説についても、我が国の経済思想史上最も大きな影響を残した人の一人である。

しかして今日、移り行く歴史の前に、ミルの名にそのまま結びつくところの、自由主義、個人主義、功利主義等は世の裁きをうけるのはこびとなつたが、当然ミルは裁かるべきであろう、しかし尚ミルの善、人道、真理の為への献身的奉仕の結晶である幾多の労作には、久しくわれわれにその真実さと熱情と周到なる

# 学内報

## 定例評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十九条による定例評議員会は、五月二十六日（土）午後三時より天六学舎で開催。

昭和三十年度学校法人関西大学収支決算、昭和三十一年度学校法人関西大学本会計収支補正予算及び昭和三十一年度学校法人関西大学第一特別会計教職員退職慰労及年金基金積立金支出補正予算等につき審議の結果、これを承認し、なおその他寄附行為改正委員会の研究資料に関する件などを討議した。

出席者（イロハ順、敬称略）

中務平吉　樫本信雄　岩崎卯一　岩本公夫　春原源太郎　西尾亨太郎　西村治三郎　西本寛一　大石雄一郎　大月伸　大島武夫　和田豊二　桂忠雄　神屋敬民蔵　寒川喜一　武田藏之助　竹澤喜代治　内藤正剛　中谷敬壽　長柄金吾　浪江源治　村尾静明　宇佐美正祐　矢野文雄　保井剛一　山崎敬義　松原藤由　政井武　近藤政士　阿部甚吉　明石三郎　澤村榮治　木村健助　水谷捻一　宮島綱男　三島律夫　白川朋吉　平井三朗　久井忠雄　久松鹿治　角田好太郎　図師親徳　佐伯三郎

## 藤本是教授渡独

文学部藤本是教授は、昭和三十年度在外学術研究員として、哲学研究のため、本月四日大阪駅発十二時三十分「はと」号で出発、翌五日羽田空港より空路ドイツに向つた。

大阪駅出発の藤本教授

なお、同教授は主としてドイツ、フライブルグ大学にて現象学、存在論、実存哲学等を研究する傍ら、ドイツの教育状況を視察し、後、ロンドン大学及びウイン大学を訪づれる予定。

座談会（才二学舎教授室）

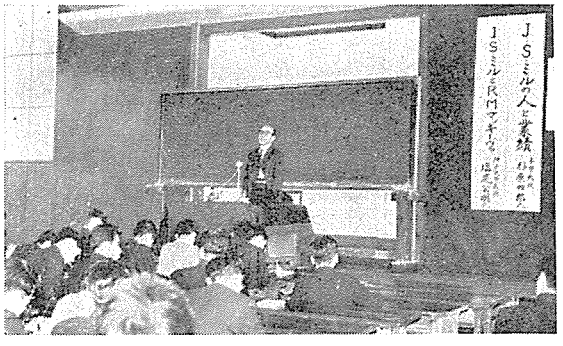
論理によつて、あるいは彼の人類愛と勇気とが断えず生きた光を与へてきたものであり、尚多くのミルにおいて残るものがあるを忘れてはならないであろう。

かゝる意味において関西大学経済学会は、ミル生誕百五十周年にあたる五月二〇日に先だち、一八、一九日、両日に亘り、雪かとまがふアカシアの落花に色どられた千里山第二学舎において、この記念会におくられた、英国領事のメッセージを、近畿地区の各大学の諸教授の参加をえて盛会裡にミル生誕百五十周年記念会を開催する事をえた。

記念会は文献展示会と講演会とに分かたれ、展示会場にあてられた第二学舎会議室には、百数十点のミル文献、並に宮島理事、高木教授等の提供によるミルゆかりの写真数葉が飾られ、両日、熱心な閲覧者八百数十人の入場が見られた。又十九日午後一時より同学舎講堂における講演は本学教授、杉原四郎氏の「J・S・ミルの人と業績」、神戸大学教授、塩尻公明氏「J・S・ミルとR・M・マッキーヴァ」と題する講演が行なわれ、充実した雰囲気の内に記念会が行われた。

これこそ香り高きバラの花と共に偉大なる社会思想家「更に大なる幸いを世に与うる身と」ならんことをねがつたミルへの供げ物であろう。

（津川正幸記）




講演会（才二学舎講堂）

校友バッヂ

# 校友

## 呉支部第三回定期總会

三月三十一日午後五時半より堺川「かき竜」に於て開催。

先づ支部長の三十年度回顧、副支部長の会計報告、母校七十周年記念拡充資金の経過報告、続いて役員の改選を終了後宴会、午後九時盛会裡に学歌高唱し散会した。

新役員
（支部長）鍵尾豪雄、（副支部長）清水篤夫、（幹事）東正実、下原太郎、藤田肇、上開地政夫、崎谷進

## 東京支部春季總会

四月十四日午後二時から目白椿山荘にて開催。陽春のひとときをガーデンパーティ気分に浸りながら歓を盡し四時散会。

母校からは新学期早々の為出席を予定されていた岩崎学長、久井専務理事は上京されず、代理として校友会組織部副部長寺西武氏が宮崎氏同道の上出席、校友会館の建設を始め今後の対外活動計画を熱弁を以つて説明された。

今期は支部役員の改選期に当るので、会則により中山支部長の再任を満場一致で先づ決定、次いで副支部長三氏を選任し四者協議の上顧問、相談役、幹事の委嘱をすることとなつた。何れも再任の公算が大で幹事には最近卒業の若手から更に新任の追加を見る筈である。

出席者
校友会本部側　寺西武、宮崎平支部側　平岡啓道、田辺明治郎、中山幸市、畑孝二郎、鈴木康之、中村酉吉、藤本比佐志、香西政一、畑義博、近藤龍雄、植田八郎、諏訪宮三郎、井口一一、西川正一、西垣友夫、田中寿蔵、大島鎌吉、飯森徳秀、沢田勇夫、大谷恭一、本原憲甫、小林稔、寺尾愈、森本定雄、菅木鉄夫、安田義哲、門田佩、村上誠一、三枝芳郎、喜田昭男、徳行煥、浅井明、狐塚正雄、有重栄、村崎正幸、秋本東洋男、筒井淳造、福部章、岸副亘、山口栄治郎、河合治、添田健資、渋川俊郎、井口卯平、箕浦市郎、柴田一夫

東京支部総会

## 昭六会春季總会

四月十八日午後六時オリオンズ寮にて開催。席上、久井忠雄氏が専務理事として母校発展の為に多大なる貢献をされている事に対し昭六会有志より感謝状及記念品を贈呈した。

参会者は十五名、突然の催しで例年になく少数であつたが、新しく参加された人々もあり愉快に歓談し午后九時半散会。

出席者
青野昌平、有賀司郎、入江寅一、今井憲夫、池田弥一郎、上野俊彦、小野武一、喜田由造、日下康夫、後藤幸重、田中俊一、寺田伴嗣、久井忠雄、福原菊治郎、柳沢幸治

## 昭七会總会

四月二十日（金）午后五時半大阪千日前大駒裏「島よし」にて開催。三十七名というかつてない多数の会員が出席した。互の頭髪や顔の皺は千里山一別以来二十五年の歳月を物語るに十分であつたが、「ヤアー」と云う一言の挨拶に場内には懐しさが溢れた。

先づ米田氏が世話人を代表して開会の挨拶、次いで前田氏が幹事を代表して会務を報告、昭七会の名簿を作成し全員に配布する旨を述べた。又幹事の改選を提案、選任を前田氏に一任したので同氏は左記の五名を選任する旨報告しこれを可決。その後宴に入り、午後十時行俊君の閉会の辞後、学歌高唱、母校及会員の発展を祈り万才三唱して散会。

当日遠出新幹事　西尾専太郎、西田昌弘、吉木由雄

来田恒治、越智比古市

出席者　北川静雄、杉本英和、山下邦宣、藤井次夫、前川熊雄、沢山宗海、植田完治、行俊喬、谷口奈良男、浦野健二郎、蔭山昇、貴答喜作、前田滝造、丸山喜三造、鎌田嘉之、越智比古市、田中勝治、稲垣治、京本善英、竹下百馬、岩佐清三郎、佐々木芳郎、甲川巌、中川英一郎、直吉巳一郎、湯浅広道、西田昌弘、藤原忠義、吉木由雄、西尾専太郎、米田恒治、図師親徳、武田太七、喜多好平、渡辺正人、森田米造、沢田英一

## 桃源会總会

昭和十五年に千里山を巣立つた我々同期生の会合を久しぶりに四月二十一日（土）午後五時より堺筋清水町「南地荘」に於て開催。

先づ世話役岩本氏より母校の近況報告、旧友の消息の後宴に移る。学生時代の昔にかえり、各自盡きぬ想い出に花を咲かせ、かつてホッケー部でその名を謳われている世界的名手の村木実氏の珍芸オドリ、卓球部主將たりし小川喜志雄氏の漫談等あり、卒業後初の出席者もあつて、徳永寛一氏、北川照敏氏より発言、今後は春秋二回の総会の要望があつた。後世話役岩本氏に対する感謝を述べ、名残りを惜しみつつ午後十時散会。

出席者　大沢憲之進、氏林清、大蔭正雄、北川照敏、曽我昭文、菅原一夫、多田時造、村木実、才津克巳、谷光倫、小川喜志雄、小川立朝、芝野淳、徳永寛一、池田幸雄、立石寛昌、田中友治、岩本公夫、村島弥一郎

昭和三十一年五月三十日発行

関西大學學報　第二九一號

編集兼発行人　久井忠雄

大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地

印刷所　株式会社　ナニワ印刷所

大阪市北区川崎町三八

電話（35）七二七一番　七二八〇番

発行所　關西大學學報局

大阪市大淀区長柄中通二丁目

電話堀川（35）一七五六番

振替　大阪　二六七七二番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年五月三十日発行（毎月一回三十日発行）

關西大學學報　第二九一號　五月號

關西大學　經濟論集

# 創立七十周年記念特輯

二九〇頁・かがり巻表紙
頒価　金三百五十円

内容

労働の生産性測定の基本問題　高木秀玄
人口論対象—方法論序説　市原亮平
ロビンソンの労働需要論　三谷友吉
—雇用理論の学史的研究の一部—
ヴェブレンと教育経済学　澤村榮治
—教育経済学研究の一齣—
J・S・ミルと社会主義　杉原四郎
—遺稿「社会主義論」研究序説—
本邦古代粟作考　鑄方貞亮
—特にその由来—
マニュファクチュア範疇について　矢口孝次郎
一九世紀イギリスにおける土地経営の一典型　荒井政治
一九世紀後半における
アメリカ南部農村社会層の分化・分解　東井正美
大戦以後の英国銀行業　森川太郎
—貸出減少の傾向とそれをめぐる問題—
終戦十ケ年の日本経済政策の動向　松原藤由
日本造船業の成立と構造　越後和典
港湾と工業　宇田米夫
—大阪港の復興計画を中心として—

關西大學　商學論集

# 創立七十周年記念特輯

二七六頁・かがり巻表紙
頒価　金三百五十円

内容

英国の小売商　山崎紀男
海上売買におけるF・O・B　賀屋俊雄
条件について
—白耳義国アントワープ港に於ける慣習を
中心として—
株式の価値と価格の関係　今西庄次郎
観光経済学の基礎概念　河村宣介
会社経営の合理化と会社制度　板橋菊松
—株式会社を対象とした経済法的考察—
経営参加と労使協力　鯰江城夫
「販売主義」の理論的根拠について　植野郁太
固定資産再評価の会計実務　酒井文雄
資本剰余金の概念と分類　河合信雄
—資本剰余金の本質理解の手掛りとして—
戦前及び戦後におけるアメリカ　安田信一
経済の成長と発展
—経済発展と産業構造についての序説—
絶対的貧困化の形態　河野稔
—ユルゲン・クチンスキー「貧困化理論」
の覚書(1)—
G・D・H・コールの社会化論　寺尾晃洋
戦後カツオ・マグロ漁業の　柏尾昌哉
実態と展望

關西大學　文學論集

# 創立七十周年記念特輯

七二〇頁・かがり巻表紙
頒価　金七百円

内容

哲学
Community とCommunicationと　井上吉次郎
サルトル哲学の出発点について　岡野留次郎
ハイデッガーに於ける『無』について　大小島真二
倫理現象と政治現象—人間学的一研究　田中熙
史学
ヘーゲルとその時代　秋山博愛
近世城下の成立　魚澄惣五郎
占地による前方後円墳の形式分類　末永雅雄
猥の心臓
本生譚研究序説　高橋盛孝
サラセン帝国の駅逓局長について　藤本勝次
武漢時代に於けるコミンテルン　三上諦聰
の中共指導
藤原鎌足伝研究序説　横田健一
—家伝の成立—
文学
「玄峯集」の註釈書について　飯田正一
「あはむ日をくも」　澤瀉久孝
「昨日今日の物語」と「醒睡笑」　金子又兵衛
己然形にやの添った形について　吉永登
E・M・フォースター　大西昭男
—その沈黙—
Evelyn Waugh の初期小説　小野勇
—特にその「乾いた文学」としての性
格について—
物語作家クラブ
「ハムレット」の第一独白　進藤浩二郎
（一幕二場　一二九—五行）
英国小説における仮構について　玉木意志太郎
（序論）
聖書の Jackel について　角田文雄
J・S・エリオットの「四つの　廣瀬捨三
四重奏曲」の標題について　堀正人
D・H・ロレンスの自叙伝　山本榮一郎
アーサー伝説発展の概要　三木治
アーダルベルト・シュティフター　見次直雄
の宿命
国際語と自然科学術語　橋田慶蔵
史学
蒙文體類統会目録　石浜純太郎
—蒙文舟殊爾総目—
文学
D.H. Lawrence の作品に用いられた英国
中部地方言の人称代名詞について　廣岡英雄
ジョン・キーツの詩に於ける　星野信夫
彼の色調
《Pantagruel》のヴァリアントにあらわ　小方厚彦
れた十六世紀フランス語
Schiller ドイツ語の史的考察　福本喜之助
自然科学
精密インベストメント鋳造法　入江深
整数の関係　河村信一

關西大學　法學論集

# 創立七十周年記念特輯

（印刷中）

發行者　關西大學
發売所　關西大學出版部
大阪市阪大淀区長柄中通二丁目